

# 精薄児の幼児教育 (一)



青木祥子  
足立寿美

精薄児の幼児教育ということが問題となり愛育研究所内に精薄児のための家庭指導グループが設けられたのは、昭和三十三年のことです。ここに、家庭指導グループにおけるカリキュラム、教師の子どものとりあつかい方などを紹介し、グループの中で、子どもたち一人ひとりができるように伸びていくかを報告しましょう。

## I 家庭指導グループとは

家庭指導グループでは、三才四才五才の子どもを主として対象としています。保育日は週二回、午前十時半より、午後一時半までです。三才四才といいますが、週二日の先生の指導よりも、むしろ、母親の力が大です。そこでこのグループは、特に家庭との連絡、家庭における子どもの取り扱い方の指導に重点がおかれています。週二日の保育日に、教師は子どもの指導にあたります。と同時に、母親への指導、母親の子どもへの理解を助けることが、重要なことな

のです。

一グループは、大体七名の子どもからなっています。どのような子どもが今までにこのグループに参加したかを下の表に示します。

	(人数)	I・O平均	C・A平均	M・A平均
Aグループ	七			
Bグループ	七	四・八	五・二	二・四
Cグループ	八	四・五	四・五	一・六
Dグループ	七	五・三	四・二	二・三
Eグループ	七	二・〇	年齢に巾かある	一・三

最初の段階では多くの場合、母親も子どもといっしょに教室の中に入り、教師の子どものとりあつかい方を見、母親自身も教師の手伝いとして子どもの世話をします。

しだいに子どもたちがおちつき、母親からはなれられる時期がく

ると、母親は当番制で代り交替に教師の助手をつとめます。

次いで、教師と子どもだけの時間が、少しずつ増えて、完全にはなれる頃、この家庭指導グループの終了となり、次のグループに移ります。

母親は、教師の子どもの取り扱いを見ます。また、他の母親の、子どもととりあつかいを見ます。また、教室の中で、自分の子ども以外の子どもを見、世話をするわけです。また時には、母親と教師ではなし合いの時をもちます。そうした中で母親はどんな時、子どもたちがどのような反応を見せるかを見、聞き、また体験するので、くり返しになります。家庭指導グループではこの母親の教室での経験が、次第に家庭での生活にもひろがっていくことが一つの大きなねらいなのです。この教師と母親のもとに、子どもたちののびのびと 各々持っている能力を、それなりに發揮し、明るい素直な性格をきずいていくのがこのグループのねがいでもあります。

## II 家庭指導グループの保育内容

精薄児であるから、その保育内容は、普通児のそれとは全く異つたものと考えられる方もありません。いったい、精薄幼児の保育とはどういうものか。ここに述べるのは、子どもの経験から出てきたもので、まだまだ不十分な点や、必要でない点も含まれております。しかし基本的には、遊びを中心とする保育です。ここに便宜上、領域を「基本的生活習慣」と「遊戯活動」にわけて考えてみた

いと思います。

### (1) 基本的生活習慣(生活指導)

これには、学校及び家庭での生活に必要な、習慣、身辺処理のことも基本的な事柄の指導です。普通児の保育内容との差があるとすれば、その差は、おそらく、この基本的生活習慣というものに、われわれが非常なウェイトをかけている点にあると言えましょう。なぜ、これを重要視するかというと、それが必要だからです。そうして、多くの精薄児が困難を感じるからだからです。

一年間グループにいた子どもたちですら、朝、友だちや先生に、「お早よう」といえる子は少ないのです。また朝教室に入ったら、カバンをかけてスモックに着換えることになっているのに、30分も戸口のところで立チン坊している子ども、スモックをきても、ポタンのはめられない子ども、手伝わってもらえるのを待つ子どもがほとんどです。グループに入った頃は、母親が、さっさと、子どものカバンをはずし、「ごあいさつしたの」。さああたまを下げて」とあたまをおさえて挨拶をさせ、ボタンをはずし、着換えさせてしまします。子どもといっしょにするのではなく、母親が全部してしまふのです。「うちの子どもは何もできない」ということが常に親の考えとしてあり、家庭にあってもその子どもは誰かの保護の下におかれてきたのです。子どもに対する「かわいそう」という気持、或いは、動作がのろろしているということのため、やさしいことでも母親が手を出し、多くの場合、過保護に陥っています。子どもたちの生活は、やりたいようにするが、さまなければ、おとなのやり

よい仕方で生活して行くわけです。その結果、子どもたちは依頼心  
のつよい意欲のない状態におかれます。そうして加うるに、多くの  
母親は、一人でお手洗いにいけることよりも、一枚のなぐり書きを  
よろこびます。ボタンをはめることができなくても、机にすわっ  
て、オルガンに合わせて遊戯ができることを願います。多くの場合  
教師はこの母親の考え方とぶつかなければなりません。グループ  
の最初の頃、朝教室に入つて来ると、さっさと着換えさせ、お手洗  
いを抱いてすませ、椅子にこしかけさせて「さあ」というふうにし  
わらせられた子どもたちを見ると、どこからはじめたものか当惑し  
たものです。

この段階から、基本的生活習慣の指導が始まるわけです。

基本的生活習慣(生活指導)に含まれる内容を細かく述べますと、

①着換え 朝学校来るとスモックに着換える。(上着をぬぐ、  
スモックの袖を通す。ボタンをはめる。)

②排泄 排尿、排便の自立。(要求を教師に伝える。パンツをお  
ろす。戸をあける。戸をしめる。またぐ。紙でふく。手を洗う。  
パンツを上げる。)

③清潔 遊んだ後、食事の前に手を洗う。(順番にならぶ。袖口  
がぬれないように、上にあげる。水道の蛇口をひねる。両手をこ  
すりまた手の甲も洗える。手をきちんとタオルで拭く。) 食事の  
時、こぼしたものを自分できれいにする。

④挨拶、返事 朝のあいさつ、「おはよう」帰りのあいさつ「き  
ようなら」がちゃんといえる。名前を呼ばれた時、元気よく「ハ

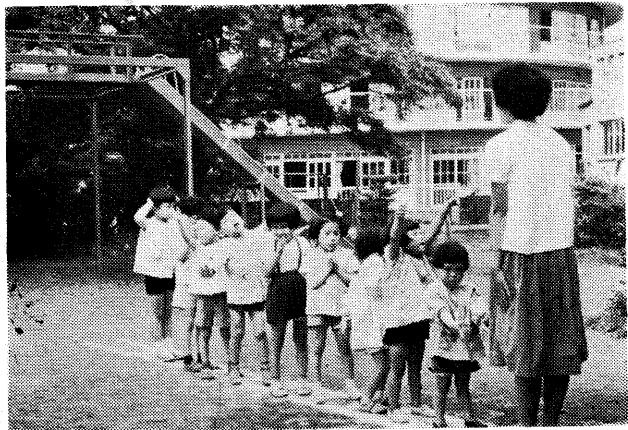
イ」と返事がで  
きる。

⑤教室内での規則  
を守る カバ

ン、帽子などを  
きめられた場所  
におく。上靴と  
外の靴とを区別  
する。遊び道  
具、絵本は、す  
んだら、きめら  
れた場所にもど  
す。

この内容の一つ  
一つを、約一年か  
かって、教師は母  
親の助力を得なが  
ら行なっていくわけです。

さて教室では実際に、どのようにするかを述べましょう。朝お母  
さんといっしょにやって来る子どもたちに、先生は元気よく「○○  
ちゃん、おはよう」と声をかけます。だいたい、初めの頃は何の反  
応も見られませんが、これを三カ月、半年、一年と一人も見すごすこ  
とのないように注意しながら声をかけていきます。また、子どもが





まわりの友だちに関心を持つよう、〇〇ちゃん、××ちゃんには  
 はどうした？”と、子ども同志を結びつけていきます。

また『排泄の習慣』では、最初は時間をきめて、便所に連れていく  
 ことからはじまります。一人の子どもの傍について、『ハイ、パン  
 ツをおろして』『戸をあけて』とやっていくわけですが、中には、  
 こわくって、どうしても便器をまたげない子がいます。また、一人

の子どもの見てい  
 る間に他の子ども  
 がもらしてしまっ  
 たりすることもあ  
 ります。傍で手伝  
 う母親は、先生の  
 やり方をいつもみ  
 ていても、つい、  
 抱いてさせてしま  
 うことが多いので  
 す。一人ひとりの  
 子どもの性格を考  
 えながら、細かい  
 ところから指導を  
 していき、次第  
 に、時間をきめな  
 いで、いきたくな

った時にいくようになります。

教師の態度としては、生活指導のさい、いつも一人ひとりの子  
 もを対象としています。特に着換えなどは、子どもの傍について、  
 細い指示を与えます。そうして、子ども自身が、『ひとりできた  
 よ』ということを経験するように、一人でできないことは助けてい  
 きます。そうして、少しずつ、『自分ひとりでできること』を、ひ  
 ろげていきます。

習慣として子どもの中に入れていくためには、何よりも反復する  
 ことが大切なようです。そうしてそのやり方はあまり変えたり、省  
 略したりはしないことが大切です。

## (2) 遊戯活動

この中には、『社会性』『音楽リズム』『絵画製作』『運動』が  
 含まれています。その内容は次のようなものです。

### ①音楽リズム

- ・音楽を聞いたりすることを楽しみ、よろこぶようにする。
- ・リズムに合わせて、簡単な動作ができる。
- ・簡単な楽器に興味を示し、使うことができる。

### ②絵画製作

- ・のびのびと書くことを楽しむ。
- ・能力に応じて、いろいろな材料になれたしむ。
- ・注意を集中してあきないでする。
- ・教具の後始末がよくできる。
- ・友だちといっしょにする。

### ③運動

- ・ 基本的な、「歩く」、「走る」、「どぶ」、「投げる」といった運動能力の向上を計ると共に、健康を増進する。
- ・ 校庭の遊具、運動具を自由に使えるようにし、また体中を使って十分に遊ぶようにする。
- ・ 集団で活動する。整列できる。
- ・ リズムや合図に従って運動する。

### ④社会人

- ・ 性格の傾向をよくみて、正しく、明るい、素直な態度を養う。
- ・ 学校や家庭、その他の場に適應して、自由な行動をとる。
- ・ 日常生活に必要な挨拶ができ、応答する。
- ・ 積木、砂場、スベリ台の遊びを通じて、独り遊びから、集団あそびへと誘う。

・ 遊びの中で、友だちといっしょに仲良くすることをおぼえる。

・ いろんな経験をし、生活範囲をひろげる。そうして、新しい経験に対しておそれたりしないようにし、独立心をやしなう。

この遊戯活動は、始めの段階では、子どもたちの前に玩具をおいとおくかたちになります。グループに参加当時の子どもは非常に遊ぶことが下手です。母親に抱かれてほんやりしていたし、教室の中に入るのがいやで泣いたりします。そこで、教師対子どもというかたちでなく、母親対子どもという形で遊びに入ります。そうして、次第に、教師対子ども、教師対子どもたち、子ども対子どもという形に移行させていくわけです。それも、子ども自身の動きをみ

て、子ども自身の動きをとらえていきます。

したがって、一日の予定はあらかじめあっても、それは子どもの動きにより変わるわけで、例えば、子どもが絵本をひろげて、「ぞうさん

をいっしょにみており、「ぞうさんおはなが長いな」とうたい始めると、それをとらえてリズム遊びに移るようになります。

教室で使われる道具は、次のようです。

室外遊具……スベリ台、ブランコ、シーソー、自転車、砂場、ボール、プール、ジョロ、水鉄砲

室内遊具……小さい積木、ままごと、まり、各種人形、絵本、乗

物、輪投げ、大積木

体操用具……マット

音 楽……レコード、簡易楽器

教師の合図で、子どもたち全員が遊んだり、いっしょにつくった



りできるまでには、早いグループでも、約六カ月たってからのこと  
です。

絵画製作では、子どもが“作る”、“かく”ことを楽しむ、“書  
きたい”という状態になるまでがたいへんです。たとえ短時間で  
も、ある子どもにとっては、机の前にじっとしていることができな  
いのです。ある子どもにとっては、クレオンは、それで何か書いて  
みるということよりも、折るものである場合もあります。また紙を  
クシャクシャにまるめてしまう子、クレオンを巻いてある紙をむく  
子、実にさまざまです。

小さい色紙、短いクレオン、かぎられた大きさの画用紙、狭い  
机、これらは、最初の段階では、子どもたちの教材としては、あま



りふさわしいものとはいえません。

そこで、①手先きだけの細いものより、むしろ、全身を使えるも  
の、②机のまわりに集まることより、もっと広い場所を使う、この  
二つの要素を満たす教材を初段階では与えます。

子どもたちが比較的、よろこんで参加したものをあげますと、  
フィンガーペインティング……最初は、手の汚れ、スモックに  
つくことを、嫌がる子どももいましたが、大きい紙に、手のひ  
らを使って書くことに、興味をもち、参加しています。

絵具……太い筆を使わずと、少し手を動かすだけで大きくか  
けますので、クレオンでは書くことに興味を示さない子どもで  
もよろこぶようです。

落葉工作……公園に散歩にいき、落ちている葉を拾って来て、ノ  
リではります。これは、消極的ながら自然観察にもなり、また  
落葉を拾うことの楽しみもあります。

運動について。

子どもたちをみますと、その半数のものは、非常に動きが鈍いと  
いうことに気づきます。不器用という感じすら受けます。もちろん  
中には、一時もじっとしていられず、チョコチョコ動く子どももい  
ることがありますが、“自由に動ける”ことは、その子どもの生活  
範囲をひろくすること、危険から自分を守ることに必要で  
す。また、集団の中の適応のためにも大切です。そこで、教師  
は、特にこの点にも力を入れています。

これで比較的成果の上った遊びは、“公園への散歩”です。幸い

近くによい公園があり、そこには、階段やとび石や、坂があり、そのうえ橋もあるので、この運動という点ではとてもよい場所でした。まだグループとしてまとまらない段階では、公園の中で、行方不明になりかけたり、信号をみてわたっている最中とび出してひやりとしたりしました。しかし、つづけてしている中に、フラフラと不安定な歩き方をする子、途中でしゃがみこんでしまつて歩かない子、ちよつとした凹凸にもつまづく子、階段がこわい子、それぞれに体のバランスをとることが上手になってきました。それと共に、庭の高いスベリ台に登つて、すべりおりることや、リズムに合わせて、円、直線の上を歩けることも上手になってきます。また、屋外というところが、子どもに解放感を与えるためか、教室ではものをいわない子、声を出さない子が、大きい声を出したり、友だち同志ふざけたりということがあらわれ、教師はそのチャンスをとらえて、グループを次の段階にすすめることができます。

### Ⅲ 子どもの成長

子どもがどのようなにして グループの中に入り、教師との結びつき、友だちへの関心が生まれてくるかをひとりの教師の記録を通して述べてみましょう。

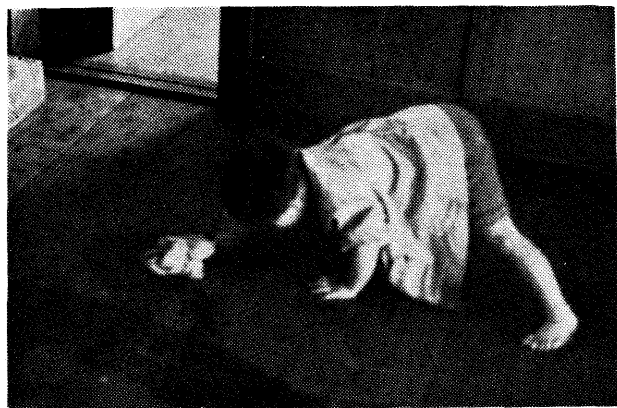
家庭指導グループ経験児童七名、幼稚園生活二年を経験した男子一名、家庭におかれていた女兒一名を加え、全部で九名が、養護学

校幼稚部となる。

生活年令は四月で四才四カ月〜六才八カ月と巾広く、I・Qも三〇〜五十九、M・Aは一才八カ月〜三才であった。保育日は週二日から週四日に増加した。教師と助手一名がついた。新入生女兒は共に学命に達しており、身体も一番大きい。この子は入学当初は、毎朝来ると泣いてい

た。男児Aちゃんは、体格もいかわり声も大きく、入ってくるなり、イヤーンと泣く。「さあかばんをおきましょう」イヤーン、なんといつてもイヤーンで、この状態が四月の二十日まで続く。お手伝いが傍につきつきりであったが、干渉しなかった。皆といっしょに席につかず、皆の席より一m位、離れて立っていた。「つかれるでしょう、すわつてらっしゃい」と椅子をすすめてもすわらない





で、イヤーンという。母親は何かおもしろい行事でもあるとよろこぶのですがと言っていたが、四月二十一日、馬事公苑に遠足にいき、その後二十四日には泣かないで一日をすごした。この日はじめて学校で弁当を食べた。何も声をかけないのに、自分の教室に机を運び込み、さっさと仕度を始めた。皆といっしょの机にすわって弁当を食べ、こいのぼりに色をぬったのが、五月四日、この日、は

じめてスモックも着る。それまで、  
「イヤーン」を連続していたし、皆といっしょにすわれるところまでいっていなかったの  
で黙っていた。少しきつい口調で、  
「きましようね」というと、「イヤーン」をいったが、すぐ思い直したように着た。それ以来いわれると着るようになったがだまっている

三十分でも身仕度しないで立っている。

女兒 B 子ちゃんも母親、お手伝いの人が、つききりであった。朝来ると入口で泣いていた。（この頃は入口で教師が子どもの来るのを待っていた）大きいクラスの世話好きな子どもがいたので、その子に誘わせて手をつないでもらい教室に入る。A ちゃんのように泣いて動かないということはなく、手伝い人にスモックをきせてもらい、世話好きの子といっしょに外に行く。今まで、父母と本人、手伝い二名という家族構成で、両親が、生存していれば二十三才になる娘を七才で亡くしているのだから、本人を非常に大切に育てたこと、本人が弱くやっとう育ったこと、母親自身も弱く、また神経質であること、今まで家から外に出たことがないという点から、音に対して敏感で、騒々しいのがきらいで、家でもテレビやラジオをかけさせないという状況だったので、初めは朝礼のレコードに泣き、太鼓の音に泣き、ピアノの音に泣き、人が多勢あつまると泣いていた。食欲もなく、この点ではつきそいの人が大騒ぎして、ヨダレかけをし、一口ずつ口に運んでやっていた。前のがのみこまれないうちに次のを運ぶのを見ていると、食欲がないのも、その食事の仕方が子どもの食欲を減退させていると思われた。食事がすすまないと、どこか具合が悪いのではないかと、母親と手伝いの人が一日中、B 子ちゃんのまわりでオロオロしている状態で五月をむかえた。遊ぶのはお手伝いといっしょにあそび、時には、子どもの入室が禁じられている母親の待合い室に連れていこうとさえた。

この状態を黙って見ていたのは、母親に他の子どもの様子を見て



指導に理解をもってもらいたいためである。家庭グループに来ていた子どもは、学校でどんな生活をするかしているし、他の子どもともなれているからこわがることはない。しかし、はじめて集団生活を迎える母親は子ども自身よりも大きいショックをうけるようである。教室の中でもこの母親は自分の子ども以外眼中にないような態度で、乱暴な子がB子ちゃんを打ったといっちは「先生大丈夫でしようか」「学校をやすませましよう」という状態であった。

五月に入り、つきそいを断わった。B子ちゃん自身は別に母親を追い求めることもなかったのと他の子どもへの影響を考えてのうである。

全体の四月のプログラムとしては、「自由遊び」「おあつまり」を中心とした。「おあつまり」も時間はみじかくし、朝おしっこにいった後、机のまわりにすわって、名前を呼ぶ、うたう、遊戯する、時には指人形をつかって話したり、紙芝居を入れた。その後自由遊びに移り、お手洗、食事、自由あそび、帰りの仕度という順で一日の保育を進めた。

自由遊びの時は机をのけ、できるだけ場所を広くし、また、教師は一人ひとりの子どもと手をつないだり、いっしょにブランコにのったり、すべり台をして遊んだ。校内の遊具もできるだけ自由に使えるようにした。時にはすべり台のこわい子どもと教師はいっしょにすべり、自信をつけるようにした。K子ちゃんは、高いすべり台がこわく、すべろうとしなかったが、何回も何回も誘い、その度に上げていたが、足をかけたので、そのうしろから「さあ、のぼって下

さい、先生もすべりたいからね」といってついていった。先生がすべり、自分もすべらざるを得なくなった。「うしろに先生いるからね、だいじょうぶ」とはげました。しかし体をこわばらしてだめなので抱いてすべった。下についた時、緊張した顔をしていたが「おもしろいねエ」というとニコニコとしてにげていった。その後、むりやりに二、三回いっしょにすべった。五月四日、午前中、はしごを一人で登るが、すべるのがこわいらしい。はしごを逆におりて来ようとするから、こちらが下からのぼり、どうしてもすべらなければならぬような状態にし、「ちっともこわくないね」「おもしろいね」とゆっくりおいつめていく。すべる時には、抱かずにひとりですべり台にしがみついている手をはなし、おしてやる。ねそべったような恰好ですべりおりていく。後からすべっていった、すぐ、ほめる。そこに見ている子どもたちも、「えらいねエ」と手を打ったり、また他の先生にもほめていただく。弁当の時いつもよりはしゃぎ、いっばいこぼしてたべる。終わると外にでて、すぐ、すべり台にいく。上までのぼるとしばらく考えているが、なかなかすべれない。他の子がやって来て「発車、オーライ」とすべっていく。傍でマゴマゴしている。「先生が下で待っているからすべってごらん」とはげます。すべっていく子の数がまし、いよいよすべらざるを得なくなり、独りですべる。やはりねそべったままの恰好で来たのをうけとめてやる。それから、その日は20回位、「発車ピー、オーライ」という合図で興奮状態ですべる。時には、はしごから足をふみはずしそうになり、頬を紅潮させていた。私はハラハラして見守っ

た。この出来事をさかいに、この子の日常の生活における状態がかわり、単におとなしい子どもでなく、遊びに熱中し、また、にげだした子をつれてきたり、大きい声をあげて何か言ったり、キヤッキヤッわらったり、名前を呼ばれて返事ができるようになった。またまわりの子どもへの関心も見られるようになった。

五月には新しく男児Dちゃんが入って来た。普通の幼稚園にいて、園長に、絵の描き方から、普通の子ではないといわれて入ってきた。能力的にはかなりよく、このグループのリーダーになりそうに見えたが、余りにも衝動的な行動が多く、やっとまとまりかけ、落ち着きを見せていた子どもの雰囲気をかきみだした。言語が明瞭で、幼稚なところは全くみられなかった。外貌も普通児と変わらず、これで、遅れているのかしらと思えるくらいだったが、このくみの子どもはみんな馬鹿だね。あの子はのろまでおかしいね」というのである。自分は活動に参加せず、廻りの子をおしたおしたり、洗面器に水をくんであたまからかけたりする。

このDちゃんに対して、はじめは驚いて見ていたが、小さいJ子ちゃんが度々やられると皆がJ子ちゃんに加勢してぶつようになつた。また、S子ちゃんをおしたおし二人でよくやり合った。六月に入っても母親とはなれず、ちつとでもはなそうとするとかん高い声を出し、その場面に関係のないこと、「こわれたおもちゃをくずすやにやったね、僕のだから返してよ」などといって泣ききけんたりする状態がつづいて、ついに、「あんな幼稚園はいかないよ」といって来なくなつた。母親もあまり熱心でなく、家庭訪問してしばらくつづ

けてやってみるようにとすめたが、とうとう退園してしまつた。この間に、子どもは落ち着きを失い、子ども同志のけんかが増加した。

J子ちゃんは蒙古症であり、しばしばすわりこんで、何もしないことが多かつた。手をつないで遊戯していても一人ぬけてすわりこむこともあつた。ことばも少なかつた。夏頃になると、新しい靴をはいてうれしそうにしているの、いいね」とほめると嬉しそうにする。返事もしない。ある日友だちがよんでいるのに返事しないので、となりの部屋から、「お返事しない！」という、大きい声で「ハイ」と答えた。すぐ、「あら返事が上手なのね」とほめて高く抱きあげた。その日の帰り、また、ために出席をとると返事をしたので、皆でいっしょに「えらいわね」と賞める。それ以後、大体において返事をするようになった。また、もう一人返事のできなかつたK子ちゃんが返事しないと、顔をのぞきこみ、背中をたたいて、返事を促したりして仲良くなつた。またゲラゲラとおもしろそうにわらうようになった。ほめられること、認められることは、誰にとつても愉快な経験ではあるが、毎日、何かよいことがあつた時はほめることが必要である。それ以後、新しい弁当袋をもつて来た時は、見せに来たり、積木で何かつくと、よびに来たりするようになった。

\*

\*

\*